

まえがき

本書の書名を「節用集史研究の射程」とする。節用集の史的展開を追究するにあたって、豊かな記述を行なうために必要な、いわば「視力」と「視野」を示そうとの意図がある。これまで手が届かなかつた部分にいかに手を伸ばすか、これまで知られなかつた辞書史上の事象をいかに的確に位置づけていくかといった、新たな手法の手がかりを求めての試行錯誤を提示するものである。

ただ、そう構想しはするものの、筆者の力量はとても十分なものとはいえない。が、ここまで検討できる、このようなことは言いうる、さらにはこのようなことも問題として取り込めば、より豊かで確実な記述研究ができる見込みがあるなど、そうした可能性を示すことは十分に価値のあることだと考へていて。

従来の手法からすれば、書誌的整理と本文系統の闡明を基盤とすること、他の各種研究も確実で豊かな実りを得ることになろう。一方では、基盤的な研究の整備だけが節用集史研究の本務だと思われかねず、見過ごされる観点や将来的な見通しが得られなくなるおそれもあるようと思われるのである。

また、一本の節用集が、出版者によつて提供され、利用者によつて活用され、さらにその影響も見られるようになる現実面は、実は、基盤的研究からの情報とは無関係に進行することもありそ�ではある。辞書利用者は、基盤的な研究を心得たうえで辞書を利用したり購入したりするものとは限らず、書店で眺めた印象や世の評判などに依存して購入するのが通常のありようなのではなかろうか。それは、現代でも近世でもあまり違わないことであろう。そこで、基盤的研究はさておいても、抑えられるだけの事象について検討を進めることができるものと考えたい。

もちろん、基盤的研究を利用できるなら活用すればよいし、逆に、諸事象の検討が基盤的研究に新たな視点を提供することも考えられないではない。そうしたアプローチ間での視点や情報のやりとりを期待する意味でも、基盤的研究の枠に囚われない検討がなされる必要があるものと考えたい。その、ざさやかな見本となればと企図したのが本書ということになる。

第一部は、まず、本書を通読するための基礎的な前提と情報を示すこととした。基礎的な部分であるため、読む人によつては既知の情報も少なくないであろうが、言語生活研究や、その基盤となる近世社会の特質に触れる部分もあるので、一読されればと思う。

また、言語生活というコトの関わる各種側面についても記してみた。言語社会のなかに節用集を定置するための研究の必要性は以前より叫ばれていたが、その手法をどうするか、どのような切口がありうるのか、そしてそのような検討が提出された場合、いかに評価するかが判然とは問われてこなかつた。ここでは、筆者が想定する手法と切口について紹介してみた。

第二部には、言語生活史研究のための準備的論考を配した。書誌的整理と本文系統の闡明を節用集史の記述的研究の骨格とすれば、それを肉付け、縁取る部分もあるはずで、それらにも目配りすることで節用集史の記述的研究の豊かな実りを迎えるものと考える。ここでは、その役割を果たすことを目的とした諸事例を収集・例示することとなつた。近世の言語生活はどこまで節用集の影響を受けるのか、近世節用集はどのように言語生活の場にあつたのか、近世節用集の諸類型と人々の位相差とはどのように組み合わされるものなのかといった、人々の生活と節用集とのあいだで考えられる問題を検討してみたものである。

第三部は、言語生活史的研究同様に遅れている、付録類へのアプローチについて記すこととした。節用集、ことに近世節用集の付録をどのようなものと捉えるかを、当時の社会とも関わらせながら示すこととした。また、すでに、辞書史研究の立場からも付録にアプローチした例があることを示すこととし、付録研究の動向や意義を知らせるよう努めた。

第四部は、近現代社会における、一般的な節用集の受けとめられ方を記すこととした。合わせて、辞書をとりまく日本語の諸事象についても瞥見することとした。「近世節用集の近代」とでもいうべき課題を設定し、これを闡明することとで節用集史の記述的研究をまつとうすると考えた、その試行錯誤として受け取ってくださればと思う。

第五部は、第四部同様に近現代を対象としたが、より強く深く近世節用集と関わった例を選び、それぞれにおける「節用集とは何か」を見ることとした。辞書史学・国語史学の専門家の場ではなく、より一般に近い人々の節用集観をすくうことを目指している。後半では、他の研究分野における利用例を中心とし、その方面での問題・課題を指摘するかたわら、それらの成果を辞書史学・国語史学研究にいかに活かせるかを考えている。第四部同様、この種の検討のありかたについて、筆者自身、ビジョンを確立できていないが、「近世節用集の近代」を闡明するためのもう一つの試行錯誤として受け取っていただければと思う。

第六部では、付録として、久保田善次良写『早引節用集』（架蔵）の影印と、上司小剣『紫合村』本文を提供することとした。善次良写本は、善次良一五歳のおりになされたもので、その年齢上、寺子屋の卒業記念として書写されたものと思われる。小説『紫合村』の主要登場人物には「節用集」と綽名されるものがおり、その挙措に作者・上司小剣の寓意が込められているものと期待される。それぞれ第二部第四章・第三部第四章にて言及してはいるが、ここに披露して多くの方に触れてもらい、意見を頂戴したいと願うものである。

以上のような構成により、本書は、目が届く限り、手が届く限りに範囲を広くとった論考の集積となつた。ここまでのことはできはする、その限界というか見本として提示するものであり、辞書史研究のささやかながらも一石になればと願つている。

なお、近代資料の多くと近世資料の一部については、国立国会図書館デジタルコレクションに依つてはいる。「特定少数の人々の使用例を分析し、それを多数蓄積・総合することで、少しでも不特定多数の使用様態に近づけないか」（佐藤二〇〇三b）との夢想も、一定程度、実現できたようと思う。また、予想外の節用集利用例にも接することができた。至便の環境整備に尽力された各位に謝意を表したい。

目 次

まえがき	1
第一部 序論	
導論	
第一章 近世節用集の展開	2
第二章 近世節用集の展開	3
第一節 近世の辞書	3
第二節 近世節用集の展開	7
第三節 節用集を定置する場と方法	17
第一節 辞書と言語生活	17
第二節 近世節用集へのアプローチ	19
第三節 近世社会と言語実態	22
第三章 近世節用集の諸相一端	25
第一節 近世初期節用集の消長	25
第二節 文学作品題目による近世節用集	31
第三節 書き入れによる検討	37
第二部 言語生活史研究へ	
導論	
第一章 農民と節用集	44
第二章 農民と節用集	49
第一節 美濃国大野郡高屋村（岐阜県本巣市）・古田家	49
第二節 上野国勢多郡原之郷村（群馬県前橋市）・船津伝次平	50
第三節 出羽国村山郡谷地新町村（山形県河北町）・楨藤左衛門	52
第四節 能登国羽咋郡町居村（石川県志賀町）・村松標左衛門	54
第五章 山城国天田郡榎原村（京都府福知山市）	55
第一章 近世初期節用集の消長	55
第二章 文学作品題目による近世節用集	61
第三章 書き入れによる検討	67
第四章 メディア性の再認識	70

市)・易藏	56	市)・易藏	87
第六節 武藏国埼玉郡八条領西袋村(埼玉県 八潮市)・小澤豊功	58	第四節 境界年齢者の節用集	87
第七節 備後国福山藩領山手村(広島県福山 市)・三谷庄右衛門	60	第五節 子どもの節用集への視点	89
おわりに	63	おわりに	91
第二章 海民と節用集	65	第四章 学習具としての節用集	95
はじめに	65	はじめに	95
第一節 佐渡国宿根木村・柴田(新発田)収蔵	66	第一節 一般論として	96
第二節 奥州名取郡廻船大乗丸船頭・清蔵	69	第二節 学習の具体例	98
第三節 菱垣廻船天徳丸船子・善蔵	72	第三節 寺子屋師匠の写本節用集	101
第四節 紀伊国廻船天寿丸・虎吉ら	73	第四節 一五歳・久保田善次良の写本	103
おわりに	74	第五節 節用集を抜粋・再編する	107
第三章 子どもと節用集	77	おわりに	109
はじめに	77	第五章 価格の推移	113
第一節 就学前後の節用集	78	はじめに	113
第二節 就学児の識字傾向から	81	第一節 延宝期	114
第三節 家庭環境と子どもの節用集	84	第二節 元禄期	114

第四節 境界年齢者の節用集	87	第三節 明和期・寛政期	117
第五節 子どもの節用集への視点	89	第四節 化政期・天保期	119
おわりに	91	おわりに	125
第四章 学習具としての節用集	95	第一節 延宝期	122
はじめに	95	第二節 元禄期	122
第三節 寺子屋師匠の写本節用集	101	第三節 明和期・寛政期	119
第四節 一五歳・久保田善次良の写本	103	第四節 化政期・天保期	117
第五節 節用集を抜粋・再編する	107	おわりに	114
おわりに	109		
第五章 価格の推移	113		
はじめに	113		
第一節 延宝期	114		
第二節 元禄期	114		
第三節 明和期・寛政期	117		
第四節 化政期・天保期	119		
おわりに	125		

第三部 付録研究へ

第三章 付録記事の信憑性

——農夫・万平、二四三歳——

はじめに 167

第一章 付録の検討のために 130
はじめに 131

第一節 付録研究の必要性 132

第二節 近世節用集の付録の性格 135

第三節 付録の多角的研究のために 139

第四節 付録へのアプローチ 141

第五節 地図史学の付録世界図把握 146

第二章 付録記事の社会性

——本願寺との関わり——

はじめに

第一節 付録記事への西本願寺の介入 153

第二節 大型本節用集の位置 157

第三節 『都會節用百家通』一件事後の諸相 160

第四節 (付論)『(大日本)永代節用無尽藏』の異文 164

おわりに 166

導論

第一章 付録の検討のために 130
はじめに 131

第一節 『大日本永代節用無尽藏』を取り上げる契機 131

第二節 天保一五年にあつたこと 132

第三節 万平の生年・没年 135

第四節 誤認記事の生成経緯 139

第五節 地図史学の付録世界図把握 146

第二章 付録記事の社会性

——本願寺との関わり——

はじめに 153

第一節 付録の研究のために 154

第二節 地図史学での捉え方 157

第三節 日本図を例に 160

おわりに 164

第五章 日本図研究と『節用集大系』

はじめに 199

第一章 近世節用集所掲日本図の傾向 203

第二章 例外的な所掲日本図 207

第三節 版種と蝦夷図	211	おわりに	250
第四節 『節用集大系』の陥穀	218	第二章 大正期	253
おわりに	223	はじめに	253
第六章 書評 柏原司郎著『近世の国語辞典 節用集の付録』	225	第一節 市島春城『節用集の功德』の俗書観	253
はじめに	225	第二節 中野重治『梨の花』にみる辞書と家庭	253
第一節 「第一部 研究篇」	226	第三節 武田桜桃編『坐右新辞典』の近世性	259
第二節 「第二部 資料篇」	230	第四節 イロハ順と五十音順	262
第三節 本書の学術的価値	232	おわりに	269
おわりに	233	第三章 昭和期	273
第四部 終焉期点描		はじめに	273
第一章 明治期	236	第一節 節用集の終焉	273
はじめに	237	第二節 イロハと五十音の交錯	277
第一節 近世節用集への思慕・回顧	237	第三節 福本和夫『私の辞書論』	281
第二節 注意される刊行例	242	第四節 複製への回路	285
第三節 早引節用集の残影	245	おわりに	290
第四節 辞書における五十音順導入の諸相	246	第四章 昭和期・二	295
はじめに	295	はじめに	295
第一節 尾崎行雄の見識	295		

第二節 戦前・戦中期の例 ——既知の存在として	300	第二節 時代設定の確認	341
第三節 戦後の例——既知の節用集	305	第三節 作者の意図をくむ	344
第四節 戦後の例——発見の諸相	308	おわりに	347
おわりに	313	第三章 昭和戦前期小説 ——岡本かの子『落城後の女』——	351
第五部 近現代節用集認識史		はじめに	
導論		第一節 関係本文	351
第一章 明治期	316	第二節 「饅頭屋本の節用集」	355
はじめに	317	第三節 かの子が参照したソース候補	359
第一節 「節用集」の名義	317	第四節 おあんの節用集のモデル	364
第二節 教養書とみる例	317	おわりに	369
第三節 物知りを節用集と称する例	322	第四章 昭和戦後期隣接研究分野	369
おわりに	322	はじめに	373
第四節 石井研堂『鯨幾太郎』	326	第一節 付録利用——教育資料史	374
おわりに	326	第二節 本文利用——演劇史	379
第二章 大正期小説 ——上司小剣『紫合村』——	337	第三節 本文利用——食文化史	384
はじめに	337	おわりに	392
第一節 登場人物・和三郎の節用集性	338	第五章 現代隣接分野	395
はじめに	338	はじめに	395

第一節 節用集認識の諸相	395
第二節 国文学研究	401
第三節 文化史研究	405
おわりに	410

第六部 付録

解説

〔その一〕 『早引節用集』久保田善次良写本	414
〔その二〕 上司小剣作「紫合村」	415

あとがき	493
参考文献	499
索引	521